

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月17日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530142

研究課題名（和文）「ユーロイスラム」の創出は可能か

：ヨーロッパにおける新しい公共圏創造の試み

研究課題名（英文） The identities of Muslim immigrants in European countries

研究代表者

中谷 真憲（NAKATANI MASANORI）

京都産業大学・法学部・教授

研究者番号：60340436

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパには 1500 万人を超えるイスラム系移民が居住している。2005 年のフランスにおける暴動に見られるように、これらの移民はしばしばホスト社会と衝突してきた。この原因としてイスラム教がヨーロッパの価値観とあわないことが挙げられるが、実際には宗教的原因は大きなものではない。むしろ就学・就業という実際の生活上の問題や、実際の政策の欠如そして移民二世・三世のアイデンティティの宙づり状態こそが問題である。

研究成果の概要（英文）：More than 15 million muslim immigrants live in Europe.

As can be seen from example of the 2005 riots in France, these immigrants have often conflicted with host societies. The reason for this is said to be the difference in value between Islamism and European secularism. However, the religion really isn't much of a problem. The real problem lie in actual life issues such as education and employment, lack of practical policies, and the "identity limbo" state in which second and third generation immigrants are stuck.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：公共政策・移民問題

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパは今、歴史的に見てある大きな変革の時期を迎えている。それは EU 拡大や経済のグローバル化の陰で密かに進行する人口動態上の変化、すなわちイスラム人口の拡大である。

たとえば、ヨーロッパ各国のイスラム人口の推計統計値(2006年)は、「フランス 7.1%、オランダ 5.5%、ドイツ 4.4%、スイス 4.3%、

オーストリア 4.2%、イギリス 2.7%、デンマーク 2.0%、ギリシャ 1.3%（各国総人口比）」であり、西ヨーロッパ全体では、1500 万人から 2000 万人程度のイスラム人口を抱えていると思われる。これは、ほぼオランダ一國に匹敵、あるいはそれにノルウェー全人口を足したほどにもなる計算である。中でもフランスのイスラム人口は 400 万人を優に超え、ヨーロッパ最大である。イスラム系移民はい

まやヨーロッパ社会の主要な構成要素の一つとなった。しかし、ヨーロッパ人系の移民に比べ、ホスト国との間でさまざまな軋轢が目立つのも事実である。

しかし軋轢ばかりに目を向けていては、日常の共生についての冷静な理解を欠くことになる。これだけのイスラム人口を抱えるヨーロッパ諸国の移民政策はそれなりの懐の深さを備えているとも考えられる。イスラム系移民にもまた“ヨーロッパの”イスラムとしての自覚が芽生えているのではないか。政府・移民双方の共生へ向けた努力を探りたい。

2. 研究の目的

ヨーロッパ各国にとって、国内に居住する・あるいは流入してくる、膨大なイスラム系移民を社会としてどう受け止め、共生の道を探るか、という課題は焦眉の急である。ここにはホスト国の政治文化が大きく影響する。イギリスのようにエスニック・グループの維持を認める多文化主義の型と、フランスのように普遍主義的共和主義に基づいて同化を求める型では、政策的対応が大きく異なる。本研究では特にフランスを関心の中心とするが、それはその移民政策がつねに同国の共和国理念と結びついて展開される独特のものだからである。

2005年秋のフランスの移民暴動を契機にフランスの移民政策については一般に厳しい見方がなされてきた。暴動は共和主義的同化主義ないし統合主義の失敗の結果と見なされてきたのである。本研究でもそうした見方や問題意識は受けとめるが、しかしむしろ、フランスにおいて移民側、そして政府側が、国是を守りつつも、こうした問題にどう対処しようとしてきたかについて考えてきた。実際フランスの政策上の努力はこの点に向けられており、それは共和主義や非宗教性原理の無原則な崩壊とは一線を画しているからである。また移民運動の側でも、フランスの共和主義に代表されるヨーロッパ的理性主義を受け入れ、ヨーロッパのイスラムとして生きることを目指す主体的な取り組みが始まっているからである。

さらに近年では、イギリス、オランダなど多文化主義的伝統の強かった国でむしろ、ブラックボックス化した文化集団を放置せず、積極的に社会的同化を図ろうとする動きがあり、移民政策におけるフランス型、イギリス型の区別自体、次第にあいまいになりつつある。

全体としてみれば、ヨーロッパにおいてはイスラム系移民とその子孫を欧州市民社会の中に統合する試みが、今、移民と政府の双方から進められている。それはヨーロッパ的な世俗的公共性の枠組みの中にイスラム諸団体を取り込むことが可能か、という意味で

もきわめて野心的な実験である。このような動向はユーロ・イスラム公共圏の創出と呼ぶことが可能であろう。それは単純にヨーロッパ社会対ムスリム移民という構図には収まらない大きなうねりであると考えられる。ヨーロッパのムスリムはもはや現実であり、この潮流を理解することが重要である。

本研究の目的は、フランスを中心とした「ヨーロッパ人としての自覚を持つムスリム（ムスリマ）の創出」に関わる公共政策を分析し、また移民側のアイデンティティに目を向けて「ユーロ・イスラム公共圏」成立の展望を探ろうとするものである。

3. 研究の方法

本研究は申請者が一人で行うものである。基本的には、文献の分析と現地調査（インタビュー）を組み合わせ進められた。

文献においてはとくにサルコジ政権における移民政策の展開に注意を払った。これはサルコジ前大統領の政策が、従来の硬直した共和主義的移民政策を乗り越えようとする傾向をもっていたと考えられるからである。

サルコジは、内務大臣時代から一般には移民に対して苛烈な政策を掲げてきたとのイメージが強いが、共和主義の限界を意識していたという点ではかなり实际的、実践的であった。

このサルコジの姿勢は特に非宗教性原理（ライシテ）をめぐる相対的に柔軟な姿勢によく表れている。したがって、サルコジの共和主義やライシテに対する見方を検討することがまず研究上の焦点となった。かつこの検討においては、共和主義に関するフランス的理解そのものについて、政治文化論的に考察する必要性が感じられた。

本研究では、共和主義をめぐる議論が、移民包摂的にも移民排斥的にも展開しうることに注目し、サルコジの目指した方向性はこうしたロジックの罫を突破しようとしたところにあったのではないかという仮説を立てた。とくにサルコジ初期の左右の政党対立を越えた組閣のあり方は、まさに移民政策におけるプラグマティックな姿勢と相即するものと思われた。

こうして、本研究における文献分析は、公共政策論と政治文化論の組み合わせという形をとることとなった。

また本研究では、文献上の研究以外に、本研究では現地における調査（インタビュー）を積極的に行った。この現地調査は23年度、24年度の二回にわたって実施した。

23年度の調査においては移民側のアイデンティティ分析に主眼をおき、フランス西部のコミュニティ・モスクのイマームや事務局長、一般人を対象として、インタビューを試

みた。

一般にフランス西部（ノルマンディー、ブルターニュ、ナントなど）はこれまで移民問題が比較的少ない地域であった。

しかし近年、移民の流入がこの地域においても増加し、それまで地元民との接触が少なかつただけにイスラム教徒に対する嫌がらせが頻発するなど、社会問題化している。

他方、政教分離原則（ライシテ）との兼ね合いでいえば、こうした地域においては現在、さまざまな手段を通じて、コミュニティ・モスクの建築が進められており、その実態を調査する必要性もあった。以上の意図のもと、カンペールのモスク、ナントのモスクなどにおいて、イスラム団体事務局長、およびイマームへのインタビューを行った。また特にナントのモスクにおいては、通常異教徒には認められない礼拝の儀式にも参列を認められ、イマームのコミュニティ住民への説法の実例を視聴することが出来た。また、大戦の記憶の問い直しの過程で、対米関係および北アフリカ出身兵（アルジェリアなどイスラム系）、ユダヤ教徒兵をめぐる議論が巻き起こっており、これらがアイデンティティ論に深く関連することから、ノルマンディーの兵士墓地での追悼のあり方の視察も行った。

さらにツールズ大学にも赴き、警察政策研究の泰斗であるバイル教授を訪ね、移民問題と警察活動について意見交換をおこなった。

24年度は、公共政策側の分析、意見聴取に主眼をおき、オランダとフランスの研究機関を訪ねた。オランダでは、ライデン大学の紹介によりオランダの多文化社会の変化と移民問題について質疑を交わすため、ライデン近郊のクリンゲンダール国際関係研究所に赴いた。上級研究員のフランツ-ポール・ファン・パッテン氏らと、2004年のイスラム過激派による映画人暗殺事件とその後のオランダ社会の変化、およびEU拡大後のオランダの移民問題全般について討議した。また、オランダの自由主義的政治文化の背景をめぐって、フランスやベルギーなどと比較しながら論じあった。

フランスでは、国立高等治安司法研究所（INHESJ）を訪ねた。ここはフランス内務省と深い関係を持つ国立研究所であり、治安政策一般の調査・立案を手がけている。移民問題についての豊富な統計と分析を有しており、副所長のカイヨール氏、上級研究員のラロユ氏と長時間にわたる討議をもった。フランスの移民問題、サルコジ政権時のアイデンティティ論争のバックグラウンド、移民団体の動向、カトリック高校におけるイスラム移民の増加などをテーマとした。

このオランダ、フランスの両研究機関との

討議の中では、双方からもはや多文化主義的政策、統合主義的政策といった単純な政策的区別は妥当しないのではないか、という意見が聞かれたのが興味深かった。

当初の研究計画ではイギリス研究機関も訪ねる予定であったが、24年度は校務のため十分な訪問日程が取れず、イギリスについては文献中心の検討となった。

4. 研究成果

2011年2月には、京都産業大学世界問題研究所例会にて、「フランスの共和主義と歴史認識：いくつかの簡単なスケッチ」と題して、研究の中間報告を行った。これはアルジェリア戦争についての補償の歴史をたどり、フランス人とアルキ（フランス側についてたたかったアルジェリア人兵士）についての扱いの違いからフランスの共和主義を論じたものである。アルジェリア人はフランスのイスラム人口の中でも大きな部分を占めており、アルジェリア系フランス人のアイデンティティ論の土台としてアルキについての考察は欠かせないものであった。

2013年2月には京都産業大学世界問題研究所紀要に「フランスの移民問題とアイデンティティーサルコジはポピュリストだったのか」を発表した。これは2010年度の比較政治学会での報告論文（未定稿）を改稿したものである。ここでは第五共和制下の左右理念対立による移民政策の行き詰まりの中で、サルコジのとった政策的手法はかなりプラグマティズム的であったと主張し、その政策を単純なポピュリストと位置付ける見方を退けたものである。サルコジは、ガレールな状況（就学・就業せず、明日に希望を持たない若者の状況）に生きるよりは、よきイスラム教徒としてのアイデンティティをもつ方が、むしろフランス社会に統合しやすい、という見方を示しており、これはライシテの枠の中で可能だと考えていたのである。

目下、こうした中間的研究を総合してユーロ・イスラム公共圏の可能性について考察する論文を準備中であるが、これまでの研究で浮かび上がってきた視点としては

- ① 共和主義というロジックの罨
共和主義が移民包摂的にも排他的にも作用することから、共和主義から移民問題を論じることで議論が円環的に閉じやすくなる。ここに政策が理念論争に陥りやすい罨があった。
- ② 移民二世・三世と一世との間の文化的乖離の問題
コミュニティ・モスクでの調査で興味深かったのは、イマームがアラブ語と仏語の双方で説法を行っていたことである。二世・三世に尋ねたところ、アラブ語を

解することがほぼ困難な者も多く、仏語で理解しているということであった。イスラムの教えを仏語で理解する、というこの構図の中に、一世とは異なるアイデンティティのあり方を見て取ることができらう。これをハイブリッドなアイデンティティととるか、宙ぶらりんのアイデンティティととるか、であるが、それは結局のところ、個々の就業・就学状況如何と大きく相関していると思われる。

- ③ ライシテに対する理解の浸透
現地調査ではイマームやモスク事務局長に対して、ライシテについてどう思うか、それを認めるか否かについて聞き取ったが、否定するものはいなかった。イスラムはライシテと併存しうるものと理解しており、ライシテそのものを中立的政策と見なす理解は一般に浸透しているように見受けられた。よきムスリムであることを通じてよきフランス人となりうる、それはライシテの枠の中で保障された正当な権利であるとの主張は、イスラム・コミュニティの中ではかなり一般的であると思われる。
- ④ オランダとフランスの両研究機関との意見交換の中でも、真の問題は宗教問題というよりは移民二世・三世の就業・就学状況に起因しており、これはかなり実際の公共政策の領域に属する問題だ、との見解で一致した。また多文化主義的政策と統合主義的政策がすでに収斂してきているのではないか、という点でも多くの一致を見た。
これは、イギリス・オランダのような多文化主義的移民共生政策の方が、フランス流の統合主義的な移民政策よりも正しい、と見なしがちな従来の見解に修正を迫るものである。

以上、文献と現地インタビューからは意外なほどの、政権側とイスラム・コミュニティ側の主張の接近が観察された。すなわち、ライシテという枠組みの柔軟性についての理解、そのもとでの積極的なムスリムとしてのアイデンティティ評価（その裏返しの二世・三世の宙ぶらりんのアイデンティティ状況への危機感）、の二点の一致である。

こうした一致点は、現在、とかく悲観的に見られがちな移民とホスト社会の摩擦問題について希望を与えるものである。たしかにイスラム過激派のテロなどがひとたび起きれば、この摩擦に大きな焦点が当てられるのは避けがたいだろう。

しかしヨーロッパのイスラム人口の大きさは現実であり、それはもはや単純な帰国政策で減少せしめうるものではない。むしろ、ユーロ・イスラム公共圏についての理解が、

政治文化論的背景を越えて、ヨーロッパ各国で、そしてイスラム・コミュニティの側でも進んでいることに注目すべきであると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 中谷真憲、「フランスの移民問題とアイデンティティ—サルコジはポピュリストだったのか—」、京都産業大学世界問題研究所紀要、査読なし、第28巻、2013、109—122

[学会発表] (計1件)

- ① 中谷真憲「フランスの移民問題とアイデンティティ—サルコジはポピュリストか—」(日本比較政治学会、2010年6月20日、於東京外国語大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中谷 真憲 (NAKATANI MASANORI)
京都産業大学・法学部・教授
研究者番号：60340436